運営委員会委員長賞

# 世代を越えた出会いが教えてくれたこと

河本　明代

出会いの形はたくさんありますが、人に伝えたい出会いというものもあります。

私と、記憶に残るお婆ちゃんとの出会いは、大学受験で浪人生活を決意したのが始まりでした。

香川から、東京の塾へ通う為一人で上京し、家賃二万円のアパートに住んでいました。お風呂もなく、冷水の出る水道だけがある四畳一間で冬に、毎日銭湯に通っていました。そこで毎日見かけたのは、一人の足が不自由そうなお婆ちゃん。大変そうな様子を見て、ある日勇気を出して話しかけてみました。

何を話したか思い出せないくらいとても自然な出会いでした。

こうして、私達は何かのご縁で知り合いになり、毎日銭湯で顔を合わせては、たくさんの話を積み重ねていきました。ご近所だったこともあり、自宅にも遊びに行って、料理も

教えてもらいました。

東京で生まれ、九十年も長い月日を、たくさんの人と関わりいろんな苦楽を経験してきたお婆ちゃんと、香川で育ち、これからの人生の基礎となる大学への進学の為に上京してきた私。全く違う生活を歩んでいる二人が、時を同じに過ごしていることに、何の違和感も感じませんでした。お婆ちゃんの生まれ育ちがとても良いというのは、話し方や、一々丁寧で洗練されている振舞に表れていて、田舎から出てきた私から見ると別世界の憧れの女性でもありました。

このような素敵な方が、どのような環境で育ち、どのような教育を受けて、どのような男性と恋をして今の美しさを磨いてきたのかとか、興味が尽きることはありませんでした。

翌年の春第一志望の学校に受かり、毎日の様にお婆ちゃんに会えなくなったものの、月日は流れ、卒業間近に会いに行った時のこと。

あんなに明るかったお婆ちゃんが別人のように痩せて、寝たきりになっているのを見てショックのあまり声がかけられませんでした。

お婆ちゃんに、お寿司が食べたいから買ってきてと言われて外に出たとき、一気に大量の涙が頬を伝ってきました。お婆ちゃんと銭湯から一緒に帰っていた見慣れた道。すでに目は涙で一杯で寿司屋までの道がかすんだあの風景は今でも忘れられません。

玄関で涙を拭って気を入れかえてお婆ちゃんの自宅に戻り、元気よく声をかけてみたものの、顔の表情は暗く、あんなにしっかりしていたお婆ちゃんが何度も同じ話を繰り返す。買ってきたお寿司のお醤油もぽたぽた布団に落ちても気づいてない。

この間、最愛の兄が亡くなったと、その時教えてくれ、私はとうとう一人になったと言いました。お婆ちゃんから寂しいという言葉を聞いたのは初めてでした。今までお婆ちゃんの陽気さを支えていた家族の存在の計り知れなさが暗黙の中で伝わってきたのでした。

そして、それから間もなくお婆ちゃんの訃報の連絡を介護の方から受けました。

お婆ちゃんの永眠を静かにお祈りしましたが、実感などなく、離れた気にはなりませんでした。

あれから十年。

別世界に感じた東京で大学生活を過ごし、就職をし、昨年同じ職場の人と結婚をし、生

まれも育ちも東京の旦那と東京の地で一生を暮すことになりました。

旦那ともまた、違う環境で育った間柄ですが、先日旦那から聞いた心温まる話し。

私の姉は三歳の頃から日舞を習っていて、それは父の母が礼節を尊ぶ人で、父に姉に日舞を習うように言ったようで、毎年正月とかお盆に祖父母の家に行った時は、姉が日舞を祖母にお披露目していて祖母がそれをとても嬉しそうに眺めていたのが私の記憶に残っていると旦那に話すと、

旦那は三年前、お爺ちゃんが亡くなる前に病院に駆けつけ、「お爺ちゃん！」って呼んだらすごくニコーと微笑んでくれたのが、意識のほとんどない中での行動で、今までにない感動を受けたそう。そして祈り叶わず、翌日亡くなったそうですがその日はなんとお爺ちゃんのお誕生日。家族みんなが集まって、お爺ちゃんの前でハッピーバースディを歌ったと聞いて、すごく胸がじんとなりました。目の前にいつもと同じお爺ちゃんがいるのに、もう歌が届かない。

線香を燻らせながらそういう話になったので、秋の静かな空気と妙に合っていて、十年前のお婆ちゃんと出会った思い出の季節が蘇り、また目頭が熱くなったのでした。

旦那とその話をしたのは九月十一日。ちょうどアメリカ同時テロから八年目の日でした。

あの事件も人がしたとは思えない話し。何を信じたら分からない世の中になろうとも、家族の愛というのは世界共通だと思っています。

テロでもたくさんの方が亡くなりましたし、今も傷が癒えるものではありませんが、それでも生きていかなければならない現実。人は、必ず誰かに支えられて生きているのだなと。隣にいる人のありがたさ。家族や仲間は本当にかけがえのないもの。

浪人の期間だけでなく、私にも辛い時期は幾度かありました。支えがあったからこそ乗り越えられてきたのです。でも、家族は今もそばにいますが、お婆ちゃんはもういません。そのことを考える機会を与えてくれたお婆ちゃんには、本当に感謝の気持ちで一杯です。人との繋がりは、いろんなところにありますが、永遠ではないことを伝えたかったのです。お婆ちゃん推奨の文庫本もたくさん読み、意見や感想を話し合いました。哲学の本もたくさん教えてくれ、懸命に読みました。社会人になってからは経験重視の生活を送っているので、毎日読書に明け暮れた生活はお婆ちゃんの助言なしでは得られなかったもの

です。今の私の形成に少なからず影響を与えた時間でした。

知識を得ることの面白さを学んだ私は、その後の就職活動では放送業界へと進みました。あれからもたくさんの出会いがありましたが、お婆ちゃんは私の中では特別な存在です。あの頃と変わらず、今でも私には大きな夢があります。

常に感謝の気持ちと強い意志を持って、明日からまた頑張って生きようと思います。

また、私もあのおばあちゃんのように、将来自分の過去を新しい世代の人たちに伝えて、何か感じ取ってもらえる人になれるように。